三河アララギ

２０２３年 令和５年６月 水無月（みなづき）

六　月　号

第 七十 巻　第 六 号

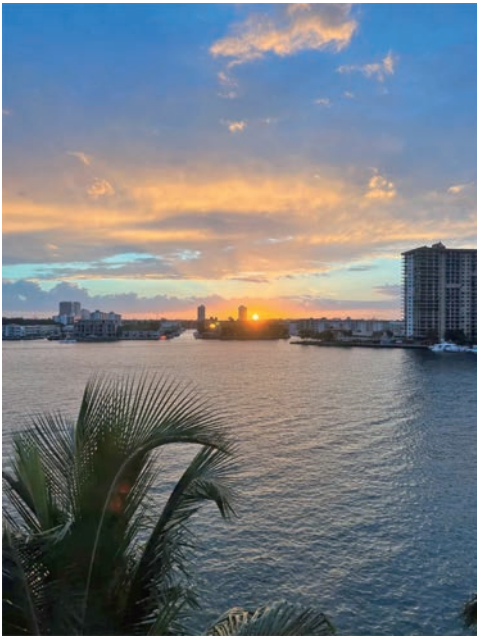
ニューヨーク日記（200）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

MY NEW VIEW

Blue Shoe Diaries



引越し完了。家のバルコニー（そうなの、バルコニーがあるのです！）からの眺め、良いよね。よーく見ていると時々イルカも見えたりするのだ。ここはマイアミです。気が付くとニューヨークの知り合いや好きなレストラン、なんだかみんなもマイアミに引っ越してきちゃったみたい。なんか面白いタイミング。みんな考えたり感じたりする事は似てるのね。

This is going to be the view from my balcony now. Yes! I have a balcony! If you stare long enough at the view, you can spot dolphins sometimes. How cool is that! I think I'll be spending a lot of time on this balcony. Yes, that means "home" is not New York anymore. It's Miami. And it seems like half of NYC moved here too. Friends, familiar restaurants, everyone seems to be here. It's funny how timing works out. We all seem to be thinking and feeling similar things. I guess, welcome to the New New York?

目次

第七十巻第六号（通巻八三四号）

表紙　本田つむぎ（1）
ニューヨーク日記(200)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々後集」　今泉　米子（5）
昭和61年七月号作品　大須賀寿恵（6）
昭和61年六月号作品　夏目　勝弘（7）
昭和61年七月号・八月号作品　岡本八千代（8）
あの花筏　弓谷　久子（10）
地球にて　今泉　由利（12）
法多山　安藤　和代（14）
娘よありがとう　清澤　範子（16）
四葉のクローバー　山口千惠子（18）
ポーランド　杉浦恵美子（20）
夏の予感　伊藤　忠男（22）
ランチバイキング　白井　信昭（24）
問わず語りの　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ
牧原　規惠（28）
稲吉　友江（28）
鈴木美耶子（29）
吉見　幸子（29）
牧原　正枝（30）
森　厚子（30）
山崎　俊子（31）
水野　絹子（31）
現代学生百人一首　東洋大学
石川　櫻子（32）
塚本　愛菜（32）
相川　海己（32）
村上麟太郎（32）
石井　美咲（33）
神原　結奈（33）
藤原　春歩（33）
伊藤　諄哉（33）
尾藤　咲良（33）
植村　公女（34）
『俳句』
木村　歩歩（34）
今泉　如雲（35）
矢崎　直人（35）
今泉　由利（35）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（36）
五感を澄ませば(12)　杉浦恵美子（38）
附録（十二）　矢崎　直人（40）
『違和感』　中屋　保之（42）
楽しい時間（１２７）　山本紀久雄（44）
『酔いの徒然』（１３４）　丸山酔宵子（46）
「かわいいニャンコの行進だ」　高橋　育郎（48）
絹の話（１５１）　今泉　雅勝（50）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（52）
初狩便り19　花野みぶり（54）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（56）
康鍼治療院　玄　翁（58）
『再び糸魚川を訪ぬ』　横山　精真（60）
編集室だより　今泉　由利（62）
「三河アララギ」について（64）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

大明竹のあひだより射す光あり冬苔の黄にかがやくしばし

わが老いのひるのねむりを目守るもの來りまた去る目白うぐひす

木下には鳥のもたらししかくれみの切込みふかき稚葉（をさなば）の苗

陸奥の赤湯にわれの友ありて香ぐはしきかな保呂羽の餅は

蕗の薹咲けるうへをも縦横に踏んづけながら枯枝はこぶ

午後はやく眼（まなこ）つむりてわが命いくらか伸びむと沈黙をする

くれなゐとましろと馬酔木ふたもとあり各々（おのおの）こぼすこまかきものを

庭中の大眞椿に花滿てり花ゆらぎつつ甘き露こぼす

滿開のさくらの花の下枝を撓（たわ）めて子の手に觸れしむるばかり

小枝挿して枯れず生きゐて花ひとつひらかむとする樒（しきみ）不可思議

歌集「草々後集」

今泉米子

変はること無くて寝椅子に今日も居り大胡蝶蘭の花白きまま

真南に向へる縁側のわが寝椅子飽くこともなし椿かがやく

わが祖先の乗馬の塚と伝へ来し黒松の樹齢つひに尽きしか

遠祖のゆかり松の断片をわが家の小さき神棚ひ祀る

鳴るほどの風さへなくて風鈴の短冊ゆらゆらにわれもゆらゆら

枯れ果てて垂れたる芭蕉の長き葉に平成元年の音のなき雨

さきがけの花ちらちらの雪柳幾月われは庭の土踏まず

設計せし巨きこの家と言はれつつ藤の杖ついて廊下をたどる

朝よりの厚き曇りの雨とならず夕べの光射して消えたり

大楓冬木となりて枯れ葉一つ枝にのこれるがわが窓に見ゆ

昭和61年7月号作品

大須賀寿恵

満天星を柊南天をたづさへ来て御馬野添に十二年棲む

ライラックと花大根と鉄線と母の好みし花は紫

弱かりし父と暮して今日の如き雨には畔草を母は刈りにき

わが十歳（とほ）の日に亡くなりしわが父の面影は一つ胃痛訴ふ

花の鉢積みて自転車ひきて歩む二千歩の後には乗らむと思ひて

繁り合ふ緑の中に臥しますか竹藪のぞきつつ今日は帰らむ

生れてよりわが心臓の搏動は凡そ二十五億回ならむ

来年は成るかも知れぬ「金のなる木」葉の出揃ひて風に戦ぐも

端渓の大き硯を洗ひ浄めておろし続くる古墨「くれ竹」

鉄をうつ音もさやかにひびきつつ雑巾を白く吾は濯ぎぬ

昭和61年6月号作品

夏目勝弘

太郎庵椿の幹の色と変りたる雨蛙が時々眼を開く

太郎庵椿の幹の濃淡そのままの色に雨蛙は息づきてをり

太郎庵椿の根方の土より出でたるか雨蛙は幹の色になりをり

近づきたる我の気配に雨蛙太郎庵椿より天竜のビリへ

生物には保護色といふ術のあり攻撃色が正しと我は思へり

春の日を呑みゐる蛙をわれも思ひ見てをり太郎庵椿の幹に

嫁に盗らるる猜疑の心を抱かしむる福祉年金の罪をも思ふ

酸素吸入受けつつ老いの弄り出だす深緑色の年金証書

価を争ひてものを買ひしこと少し貧しく育ちしわが性思ふ

タウンウォチングが商売となり短歌作りなどは金にはならぬ

昭和61年7月号作品

蒲郡　岡本八千代

中村不折の「石冷」の書軸かかげあり今日の先生の家の編集室に

不折の書「石冷龍蟠風高鶴瘦」を教はりて我は訓読みをする

米国（アメリカ）より帰り来たれるにまた逢ひて今宵酌み交はす地酒神杉

降り立ちし武蔵台の小さき駅はは夕暮れの遠雲ひとつ

白糸台の団地めざして歩みゆく西浦の如きタンポポの道

白く小さく遠富士見ゆる白糸台の娘らの家に今夜泊らむ

ベランダにけふの白き物干しおきて暫く遠き白き富士の頂

水玉模様の夏の一張羅を手洗ひす水に水玉の白きが嬉しく

黄素馨の咲きさかる中を嫁ぎゆきし八年前の娘を思ふ

別れ住む幼らのことをまた話す門の黄素馨の黄の花明かり

昭和61年8月号作品

八幡橋まで来たれば五坪のわが畑に動きゐる見ゆ夫の白きシャツ

新らしきま白き軍手をわが嵌めて畑に出づる夕暮れてより

畑は五坪低く短かき二畝に農林一号の藷を挿したり

赤土を耕しおきたるわが畑に梅雨の雨一日降りしきるなり

耕したる畑の土の赤土を摩訶不思議なるものと見てゐつ

畑をただ見るだけにして夕暮の風は海より吹き通りゆく

あの花筏

豊川　弓谷久子

花見よりはや一週間桜の花は散り果てをらむ形原神社

惜しみても詮方も無し余りにも早く過ぎたり今年の桜

今も目に残る風景御津川の川面流れるあの花筏

四年ぶりの広幡神社のお祭りぞ祭囃子の音近づきぬ

お揃いの着物の子等のひく山車が表通りを今通り過ぐ

祭り気分に暫し浸りぬ遠ざかる祭り太鼓の音聞きながら

子に連れられ今日は選挙に出かけ来ぬ四年ぶりなり選挙会場

朝刊にまずたしかむる一票を入れたる人の当選を

伸び立ちて穂先にピンクの花一輪始めての花名は春桔梗

枕辺の電気スタンド新しく子が取り換えてくれ行きたり

手のひらをかざせば灯る新しき電気スタンド楽しくなりぬ

露地道の草を掻きをりうす曇り風無き今日は草掻き日和

都忘れのうす紫の花見つつ奈良の旅路を憶いてゐたり

半年ぶりに帰り来りし雀等がパンのかけらを庭についばむ

足早に卯月は過ぎぬ気が付けば黄金週間はや目前

地球にて

東京　今泉由利

参拝は日没までとぞ知らさるる東福寺光明院に入る

室町の世に来しことよ静静と光明院摩利支尊天

現世と極楽浄土を隔つるは水の河あり火の河のあり

同じ個所何度目かと読みかえす身につかぬこと身につなぬまま

ラスゴーの洞窟の牛の絵の三万年前に描きし人を

南極に近くありたりパタゴニア古人刻みし石の矢尻を拾ふ

生きてゐる地球の上に地球のままにほんの少しのことだけ知りて

竹のこと速く成長するためにしなって折れな節の存在

始まりがあったのだから終りもきっと太陽系の地球のことよ

月面に六十年前の人類の足跡残っているだろうおだやかな月

南極にて恐竜化石の発見が二足歩行のティラノサウルス似

強くなる他に方法は無きものとどんどん強くなりてゆきゆく

人間の神経ネットワークの長し長し地球４周分とのことと

祖父母との父母との折々に親鸞上人のお教え思ほふ

「一即(すなわち)十」一が単一性十は無限親鸞聖人京都に生まるる

法多山

豊川　安藤和代

喜々としてひよ啼く空よ私にも何か佳き事ありそうな朝

法多山厄除けダンゴ孫の土産この一年も強く生きたし

春風に誘われ歩く野の道のすずめ野えんどう蝶を遊ばす

幼な日の駅裏通り様変りコンビニ広く夜を感じず

オパールを散りばめし如満天星を眺めておれば心は乙女

孫嫁の便りうれしや昼に読み朝読み夕読み桜満

別れあれど出逢いうれしと子も孫も教職なるを最高と言う

向日葵を蒔きし明日のよき湿り心も軽く雨の音聞く

「姉さん」と吾れを呼びくるる従妹いて吾が生活の疎かならず

川岸のスカンポの紅やさしくて蓬の緑愛撫しており

花冷えのひと日を屋根に二羽の鳩身じろぎもせず誰れ待ちいるや

裏庭の沈丁花の香ながれきて好みいし母偲ぶ夕暮れ

誰に何を伝えんとしてか長々と伸びてアロエの花はオレンジ

新緑に清し山脈昨日今日悲しきまでに黄砂にけむる

祖父母父母嫁を夫を介護せし日びなつかしき今日の夕焼け

娘よありがとう

春日井　清　澤　範　子

足弱くなりたる吾の今頃は小鳥の声を癒され聞きぬ

足弱くなりたる吾は一心に命ある限り頑張り生きる

抗癌剤の青色の粒三錠をのみて早や五ヶ月になる

吾が庭の赤白まじりの椿花えんがわに出て見る娘と吾と

ひざ掛けをして市民病院へ来ぬ車椅子を引く娘よありがとう

庭に咲く椿次ぎつきふくらみて吾が家に春の雰囲気漂う

四月まで通なれたる病院の薬の種類変わり来にけり

六種類の色どりよろしき薬なり製造中止になる薬の一種類あり

晴天の続きし空を見上げれば初夏の風なり雲流れゆく

ポン酢に浸すキャベツ人参刻むなり娘は台所に立ちシャキシャキシャキ

余命一年といわれしから早や五ヶ月過ぎむとす

十一月二十八日は私が抗ガン剤を飲み始めた日作歌を頑張り五ヶ月過ぎぬ

夏日にも雨降りの日は肌寒し応接室にストーブをたく

四葉のクローバー

豊川　山口千恵子

散り敷ける赤き萼を踏みて行く爛漫の桜はや終はりたり

回覧板持ちきてしばし立ちばなしライラックの花咲きゐる庭に

道端の草むらの中に見つけたるみどり色濃き四葉のクローバー

みつけたる四葉のクローバー挟みをく形整へ日記帳に

青々と芽出そろひし鉢の脇に未だ芽吹かぬ斑入りキボウシ

ギボウシの鉢土指にさぐり見る尖り芽幾つ指に触るる

選挙カーわが狭き路地にも巡り来て候補者名を連呼してゆく

呆けたるタンポポ並ぶ道の脇風の凪ぎたる夕方の道

今日も又雨戸閉ざせる友の家散歩の道に見て通るなり

君子蘭今年も花の咲かざりし春の陽射しの庭に出したり

花の色二日見ぬまに色あせぬスーパー脇の八重桜の花

田の中の道をかけゆく高校生部活のユニホーム着たる一団

行き会へる誰とも話しすることなくスーパーに今日も買ひ物すます

切り株より芽生え来たりぬダチュラの芽春の陽射しにみどり伸びゆく

米糠と共に貰ひし堀りたての筍重し両手にずっしり

ポーランド

蒲郡　杉浦恵美子

ポーランドは三つほどしか知らざるに応募したりけりホストファミリー

一箇月も結果を待ちて我がゲストはルーズ舞踊団の団長なりとぞ

ヨアンナてふ名のみが情報その外はポーランド語など一字も知らぬ

稲荷寿司おにぎり用意してみたがお口に合ふか会ふまで分からぬ

エミコサン呼ばれて見ればヨアンナは案外小柄の笑顔の人なり

我が家にてＷｉ－Ｆｉ接続四苦八苦してゐるうちに最早友達

お互いの言語少しも知らねども翻訳アプリが仲を縮める

少女達ドレスエプロン三つ編み花輪素足真白し民族舞踊

こんなにもしなやか軽業表現のダンスありしかルーズ舞踊団

ヨアンナはルーズ舞踊団の振付師民族舞踊の花輪の意味説く

ヨアンナに深夜の電話少女達和室に寝かされ不安を訴ふ

ダンサー達年少何しろ十二歳ダンスほどには素顔は幼し

ヨアンナは風に戦げる木の葉見てダンスの振り付け思ひつくとぞ

この歳になりて未知なる世界との繋がり持てるわれら人間

ポーランドショパンのふるさとくらいしかイメージなきが今や憧れ

夏の予感

大阪　伊藤忠男

潤滑油切れてよろめく友を見て我まだまだと四股を踏むなり

我が顔をじっと見ること無き故か記憶にあるは二十歳なりけり

妻の顔眺めて皺を数えたり我勝れりと笑みを抑える

家内顔紅色崩す縞模様歳に勝てぬか七十と四

あれ藤か桐の花だと家内言う初夏を彩る紫の色

ここかしこ藤色ずくめまだ卯月夏の訪れ早き予感が、

車乗りクーラー入れる入れないか迷い迷いて家に着くなり

花なのか葉かも知れない萌え黄色一面覆う春の山々

花冷えか雪雲北に鎮座して冷たき風が頬をかすめる

もやもやと揺れるひかりに霞む山黄砂にマスク付けたままなり

賑やかな日が戻るのか地下鉄に赤黄のスーツ目立つこの頃

朝起きて湯船に身体横たえる窓はしらじら時静かなり

鶯の鳴く声聞こえ目を閉じる風音混じりオーケストラに

快晴の天気予報にデジカメの充電ぬかりなきがあだなり

太陽の日差し弱きや薄もやに覆われ青き空撮れぬまま

ランチバイキング

豊川　白井信昭

麓なる今し駐車場杖をつく妻と孫とに付きつ離れつ

据えられし古き牽引車孫遊ぶ我つき添いて妻は外に待つ

古里の春の祭りも三年ぶり朝六時に鳴る号砲一発

わが家の遠く近くより選挙カー連呼する声日に幾度も

候補者の声がけ手を振る横の道われ生垣に水仙うえる

七枚のパズルを解く如幾度かはめては外しくり返しをり

今日よりはまず水仙をば移さむとミニスコップ持て土を掘りだず

コデマリの根のこの長さ生垣に抱き抱えつつ植え込みにけり

み社の葉替すみぬ楠木の若若葉萌ゆる新緑まぶし

み社の玉垣伝う楠木の緑の樹下歩道をゆく

山の上の『蒲郡クラシックホテル』会場は別館ホールにランチバイキング

久方の竹島見ゆる上り道つつじ祭りはや花時すぎし

あいにくの天気に車こみあいて本館裏側今し駐車場

和やかな雰囲気の中に会食すわが五人（たり）の時ゆっくりと流る

ロータリーのなか築山に一本の幹太太し三河黒松は

問わず語りの

埼玉　矢崎直人

妹と母と電車で行く秩父羊山公園芝桜みに

乗り換えの電車トイレに行くうちに出発進行駅で足止め

武甲山ながめる丘の芝桜香りが丘をのぼりきにけり

朝の鳥カーテンの向こうベランダに来て囀れる何羽来ている

数年に一度花咲く君子蘭今年は三鉢花をつけたり

上中里平塚神社の蝉坂で問わず語りの翁に出会う

「平塚山」田中角栄筆の額　門を潜りて花水木咲く

滝野川会館横へ近道を問わず語りの翁に教わる

だんだんに曇りゆく空黄砂降る雲がだんだん近寄りてくる

ついに降る雨がだんだん降ってくる降るぞ降るぞと言われし雨が

乗りしバス上方の窓開いていて雨がポツポツ吹き込んでくる

永き日のホームセンター立ち寄りてグローブ買って家路につけり

二十年ぶりにグローブ手にはめて同級の友とキャッチボールを

ボールとバット身体の使い方確かめる時間の空白ぎこちない腕

雨の日にグローブの泥落としクリーム塗って手入れしておく

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

わが夫の育てし桜の木の下に皆々揃ひ写真撮影
春の日に孫等集ひ来それぞれの悲喜交々の旅立ちのあり
わが夫のメダカの学校らしきもののまだまだ続く幾つになりても

牧原規恵

貰ひたる手作り甘酒飲む今宵老三人のほつこりタイム
深夜二時母に起こされ眠られずしらじら明くる朝を迎へる
テレビにてちらほら聞こえる桜便り今年は近場でさつと済ませぬ

稲吉友江

厚切りのトースト頬ばり語り合ひし友との日々の間遠くなりにつ
いく度もこの四季桜の坂路をのぼりて友と来しよこのカフェ
時々に思ひ出づるよ友のこと今日はひとり来このカフェの前

鈴木美耶子

おもしろく伸びたる桧木常しへの姿生かして作品となす
脳内に求めゐるものに出合ひたり風に誘はれ見つけし枝ぶり
冬晴れの静かなる山一輪の赤き椿に心ぬくもる

吉見幸子

三種類の麻酔おとされ始まるか十五分ほどと白内障手術
手のひらにわづかの水をうけてみる七日ぶりなり顔をひたさむ
朝夕に朝昼夕に寝る前にと眼薬五本時間差ふくざつ

牧原正枝

桜咲く岬の向かふに霞立ち一つになりぬ海色の空
桜咲く岬の鐘の鳴り渡る幼に添へたる姉の手あらば
春休みの孫と二人のシアターにてそつと「ばあば」と起こされて居り

森厚子

風もなく冷たき午后に散歩する澄みわたる空に白き月冴ゆ

足下ろすに床の冷たさ右左去年もありしか訝しく思ふ

庭はすでに草芽ぶきだす去年に咲きし花のいくつ絶えホトケノザ咲く

山崎俊子

何よりも心に沁みるその手紙十五の春の「私の家族へ」

伊勢湾のはるか沖ゆくタンカーの動かぬ影よ小島の如し

カーテンの葉陰さはさは春告げる私も今日はどこかへ行かう

水野絹子

現代学生百人一首

東洋大学

プラトンもアリストテレスも教えてはくれない進路も君の気持ちも

茨城高等学校一年（茨城県）　石川（いしかわ）　櫻子（さくらこ）

ふと香る蚊取り線香脳裏にはあの穏やかな亡き祖父の笑み

江戸川学園取手中学校二年（茨城県）　塚本（つかもと）　愛菜（あいな）

生き方を教えてくれたおじいちゃん最後の教え人は死ぬこと

狭山市立堀兼中学校二年（埼玉県）　相川（あいかわ）　海己（かいき）

学校のリモート授業寝落ちして起きたら画面に僕しかいない

西武学園文理中学校三年（埼玉県）　村上（むらかみ）　麟太郎（りんたろう）

待つ人がいるから毎日病院へがんばる母にエールを送る

いすみ市立国吉中学校三年（千葉県）　石井（いしい）　美咲（みさき）

彼が打つボールは綺麗にゴールへと私のハートに３ポイント

千葉市立葛城中学校二年（千葉県）　神原（かんばら）　結奈（ゆうな）

七枚に大坂なおみの強い意志優勝で示す命の在り方

国分寺市立第五中学校三年（東京都）　藤原（ふじわら）　春歩（かほ）

歓喜の輪ハイタッチじゃなくヒジタッチ新しい日々始まる一歩

専修大学附属高等学校三年（東京都）　伊藤（いとう）　諄哉（じゅんや）

痩せていくホッキョクグマを思い出しレジ袋からエコバッグへと

西東京市立青嵐中学校二年（東京都）　尾藤（びとう）　咲良（さくら）

『俳句』

屈託のなき少年や紅緑忌　植村公女

辻堂の開きて若葉明りかな

雲の峰バイオリズムの沸点に　木村歩歩

流れ行き雨にて還らん春の雪

菜の花や鳥と影の二人きり

屋敷跡崩れし壁に白木蓮

桜散り人伝に知る転居先

惜春や旅立つ孫の背を送り　今泉如雲

津軽より南の町へ花便り

弘前の城下に江戸彼岸桜

寺に花学校に花城に花

鉢三つ花つけ祖父の君子蘭

動いては停まる秩父の春電車

燕群れ秩父の町の外れかな

八重桜そびゆ勇壮武甲山

春の日やグラブにボール入る音

孟春の天に尖るる九条葱

一番も二番も吹きぬ春三番

もてなしは数滴絞る生姜酒

小さき実をすでに宿して梅の花

一歩ゆく一歩近付く行く春に

山いくつまろまろまろ京の春

矢崎直人

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

勝沼のトンネルぬけし春の「ござ」　雄山

うろこ雲魚がとれるまえぶれか

コロナ禍でむすめによばれ孫の世話

衣替え一雨一度の寒さかな

姥捨の棚田の水も光る春

捨案山子役目おわりか我は未だ　秋山

年の瀬に次に期待す蹴る足を

柏手の響きよろしく初参り

天高く風に一声秋きたる　雅山

夏の草畑の中で戦かな　**金子**

ひらひらと落葉舞い散るかるいざわ　**恵風**

母ここに冬のくれない共にみる　**貴山**

耳寄せて三味線草のペンペンペン　**由利**

免疫力携へてをり今日の春

五時に目覚め起きてたまるか春中ば　**精真**

春の夜に死を語りても酒うまし

雨やんで昭和の人の庭桜

五感を澄ませば（12）

杉浦恵美子

言霊

恐みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ　『万葉集巻第十五３７３０中臣宅守』

（名を呼ぶことは慎しむべきことだからと、言わずにいたのに、越路の手向けの場所に立って、とうとうあなたの名を言ってしまったことだ）

作者中臣宅守は、狭野弟上娘子との不義の恋のために、越前国に流罪になったといわれ、妹とは、仲を引き裂かれ、都に残された恋人のこと。古代は、遠く離れている人の名を呼ぶと呼ばれた人の魂が抜け出してくるという信仰があり、これは、慎んでいたのに、彼女と離れて行く辛さからつい名を呼んでしまったと云う意味の歌。

もちろん彼女の実名はわかりません。古代は、実名で呼びかけることは親や主君だけに許され、それ以外の人が呼ぶのは極めて無礼であると考えられていたようです。

またある人の本名は本人の霊的な人格と強く結びついており、その名を口にするとその霊的人格を支配することができるとも考えられていたようです。

出し抜けに何が言いたいのかと思われそうですね。

実は、現代は言葉の種類が豊富な割には使い方がぞんざいだったり、ましてや「言霊」の精神が薄れて来ているのではないかと感じており、反対に昔の人々の言葉への向き合い方に興味を持ったからです。

例えば今や完全に市民権を得ているキラキラネームについてこんな話を聞いたことがあります。

ある親御さんが子供の名前に「腥」という字を使おうと思いました。

「月」と「星」の組み合わせ。うーんロマンチック。

そこでこの漢字を調べてみると、意味は「なまぐさい」。

この漢字の偏である「月」は「にくづき」の方なんですね。ついでに「星」も「刺激が鋭い」という意味があるそうで、つまりあわせて「生肉や脂肪のつんと鼻にくるにおい」

さすがに人名には使えませんね。

このように見た目だけに飛び付くのは、その言葉にこもる言霊というものに気付いていないせいでしょうか。

現代の我々は、語彙が豊富になり表現力が高まっているかと思いきや、豊富なゆえに逆に一つ一つの言葉を大

切にしていないのかもしれません。

話は戻って、

中臣宅守はつい恋人の名前を声に出してしまいました。

私の想像では、それは叫んだりするのではなくきっと囁くような小声だったのではないでしょうか。

枕草子に「蚊の睫毛」の落ちる音まで聞き取ったという人の逸話があります。

随分大げさですが、昔は、騒音こそ例外で、どこにいても、静寂に包まれていたでしょうから、必然的に小声でも聞き取れたでしょうし、聴力も鋭敏に研ぎ澄まされていたことでしょう。

それに反して現代は静寂を求めるのが難しいほど。

現に今も家の前を自動車が通る音がひっきりなしに聞こえます。慣れっこになったとは言え、頭のどこかでは軽いストレスを感じているのでしょうね。

逆に音に鈍感になっていたり、聞こえが悪いからますます大声になったり。

また声が小さいことは消極的と同一視し、弱点に見られてしまう面もあります。

世の中も随分変わったものです。

ところで、日本人は英語が下手だとよく言われて来ましたし、その克服のために様々な取り組みがなされてきたにも拘わらず相変らず効果が見られません。

その理由の一つが、日本人は昔から「秘すれば花」的な、たとえ日本語でも「言う方がよい」より「言わない方がよい」が勝っていて、積極的に話す習慣がなかったからではないか、と思います。

だって本名を声に出したら災いがあるかもしれないと、言霊を信じてきた民族性ですから、ぺらぺら喋ることへの抵抗感が遺伝子に組み込まれているかもしれません。

ですから一概に日本人は英語が苦手＝だからダメと決めつけるのではなく、そういう日本人の特性に目を向けることも大切なのではないかと思います。

今海外でも通じる日本語と言われる「おあいそ」「おまかせ」「おもてなし」「かわいい」「もったいない」などはどれもいかにも日本らしく奥ゆかしい言葉ではないでしょうか。

そしてそれらを口にしたら、優しい気持ちになることは間違いありません。

眼力は示せど微笑は伝はらぬマスク外せば皓歯が躍如

附　録（十二）

矢　崎　直　人

【見芝桜於羊山公園】

動いては停まる秩父の春電車

母と妹と一緒に電車で秩父の羊山公園に芝桜を見に行きました。各駅電車でのんびりと行く旅です。東飯能駅で川越線から西武線に乗り換える時に、トイレに行っている間乗る予定だった電車が発車してしまい、約四十分ホームの待合室で待っていました。西武鉄道に乗り換えてからは単線なので駅に停まる度にすれ違う電車を待ちます。秩父の街から歩いて十五分くらいで羊山公園に着きます。駅から歩く道の途中で山に入って行くあたりに燕が何羽も飛んで来て驚きました。羊山公園には八重桜が満開でした。風がしたから吹き上がってきます。良く晴れて武甲山が見える丘を芝桜の香りをのせた風がのぼってきました。

妹と母と電車で行く秩父羊山公園芝桜みに

武甲山ながめる丘の芝桜香りの丘をのぼりくる風

【見翁語於滝野川】

北区の滝野川会館で句会がありました。昼の句会の前に上中里駅で集合して旧古河庭園で吟行をしてから滝野川会館に向かいました。集合したのは四人で、上中里駅から平塚神社の脇を通る蟬坂を上っていたところ、自転車の篭に苗を入れたおじいさんに声を掛けられました。近所に住んでいる方で東京と千葉で畑をやっているそうで、滝野川会館への近道を教えてくれることになりました。細い道を入っていくと墓所があって、そこには「平塚山」の扁額が掛けられていました。この文字は田中角栄の手によって書かれたそうです。

上中里平塚神社の蟬坂で問わず語りの翁に出会う
「平塚山」田中角栄筆の額　門を潜りて花水木咲く
滝野川会館横へ近道を問わず語りの翁に教わる

永き日のホームセンター立ち寄りてグローブ買って家路につけり

中学の野球部の同級生とキャッチボールをしています。ＷＢＣの日本チームの活躍の話をしていたら野球をやりたくなりました。お互いにブランクが長く最初はぎこちなかったのですが、やっているうちに昔の身体の動きを思い出してきました。

春の日やグラブにボール入る音

『違和感』

中屋保之

『お訴えをさせていただきます』。政治家の街頭演説などで使われる言葉に、多くの日本人は違和感を覚えているのではないか。〝お訴え〟？〝させていただく〟？

当の本人は、聴衆に（あるいは、国民に）対して丁寧に語りかけているつもりなのであろうが、そうは聴こえない。更には、多くの議員が自分のブログで平然と使っているというから驚く。元来「訴え」という言葉には、相手の注意を自分へ向けようとする強い意味があるので、これに丁寧語の「お」はそぐわない、とする学者の意見に賛同する。ましてや、謙譲語の「させていただく」をつけてしまっては、本気で訴えていないことを露呈しているようなものだ。

若者言葉にも『違和感』がある。飲食店などでよく耳にする「千円からでよろしかったですか」の〝から〟って何？〝～から〟は、「～から～まで」というように、一定の距離や幅を表す場合の出発点として使う言葉だそうで、「千円からお預かりいたします」の場合は、「千円のうちから一部の金額を預かる」という意味になる。しかし、受け取ったのは千円そのものであり、一部ではないために「千円、お預かりします」が正しい言い方となる。因みに、ぴったりの支払いの場合は、釣りを返すという要件（お預かり）がなくなるので正しくは「千円ちょうど戴きます」であろう。

『このケーキ、〝やば〟くね？』『うん、マジ〝やばい〟！』喫茶店での若い女性同士の会話を再現してみた。ここ数年ですっかり定着した感のある〝やばい〟の使い方に、ある年齢以上の方々は『違和感』を抱くのではないか。〝やばい〟という言葉は、もともとは「危ない」「法に触れる」という意味で使われてきたはずである。それが二〇〇〇年代に入り、若者の間では「とても素晴らしい・おいしい・かっこいい」という意味で〝やばい〟を使うことが定

着し始めたようである。付随して、『やばく〝ね？〟』など、語尾を必要以上にはね上げるのにも『違和感』を抱いてしまう。若者に嫌われついでにもうひとつ。公共交通機関内で、わき目も振らず化粧に専念している若い女性を見かけることがある。人ごとながら、先の尖がった道具で眼のふちに色を施している姿は『違和感』そのもの。揺れる社内で怪我でもしないかと余計な心配をしながら、我が孫娘には真似してもらいたくないと切望している。「秘すれば花」、古来から伝わる美しい日本語或いは伝統的な日本文化が急速に崩壊しているように感ずるのは私だけであろうか。

東京のある駅の案内に「A・I」なるものが音声として使われている。「次は、いけぶくろ、いけぶくろ（池袋）」と聴こえた。私たちは「いけぶくろ」と、【けぶ】にアクセントを置いて発音する。同じく都内に高円寺という駅があるが、「こうえんじ」と【こ】にアクセントを置かれた方が耳触りが良い。が、A・Iくんは「こうえんじ」と宣（のたま）っていた。いかにも機械的なもの言いで、ちょっとした『違和感』がある。

「めだかの学校」という童謡がある。作詞家茶木滋が幼い息子と散歩をしていた折、水辺にいた息子に「めだかがいるよ」と言われて自分ものぞき込むとめだかはいなかった。息子に「あんまり大声を出すから逃げてしまったよ」というと、息子は「大丈夫、また来るよ。だってここはめだかの学校だもん」と言ったそうで、このやりとりが「めだかの学校」の詞のモチーフとなった、と聞いた。歌詞の中に「だれが　せいとかせんせいか」という箇所がある。私には、「だれが　せいとかせんせ〝え〟か」と聴こえてきた。『違和感』を抱いた私は、幾つかの歌声を「YouTube」で確かめてみた。結果は、「だれが　せ〝い〟とか　せんせ〝え〟か」であった。そういえば、東京（とうきょう）はと〝お〟きょ〝お〟と発音しているが、なぜか『違和感』は、ない。

「歴史的仮名遣い」と「現代仮名遣い」が混在している日本的曖昧さが、心地よい。

楽しい時間　127

2023年4月30日

山本紀久雄

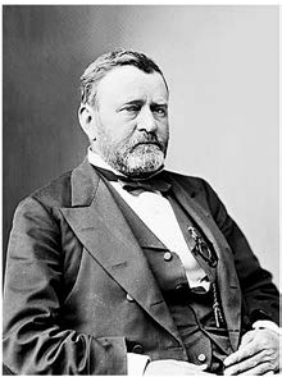
「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十二

明治13年（1880）は、明治天皇が天皇としての権力を日常的に行使したと言ってもよい最初の年であった。

明治天皇が明確な判断を下したものが「外債問題」である。この問題には米国のグランド将軍の来日が絡んでいるので、その経緯を述べたい。

まず、結論的に述べれば、グラント将軍の指導・警告が明治天皇の意思決定に強く影響を与えたとして指摘できる。

グラント将軍は米国南北戦争時の北軍の最も有名な将軍で、第18代アメリカ合衆国大統領であり、1877年（明治10年）世界周遊の旅に出た。最初の訪問国は英国、続いてヨーロッパ諸国を歴訪し、エジプト、インド、シャム（タイ）、中国を経て日本に到来したのは明治12年（1879）6月、軍艦リッチモンドで長崎に入港し、横浜に向かい、到着は7月3日。翌7月4日、日本側の要請で明治天皇はグランド将軍を引見した。明治天皇の引見の際の印象について、グラント将軍の世界一周旅行の同行者でニューヨーク・ヘラルド紙の記者ジョン・ラッセル・ヤングは『Around the World with General Grant』で 以下のように記している。（参照『明治天皇・上巻』ドナルド・キーン著　新潮社　2001年刊）



《皇帝の身のこなしは、ぎこちないまでに窮屈で、まるで生まれて初めての体験を出来るだけうまくやろうと努めている人のようだった。将軍と握手を交わした後、皇帝はもとの位置に戻り、手を剣の柄に置いて立ち、きらびやかに着飾った金色燦爛（さんらん）たる一団の方に目をやった。その様子は、まるで彼らの存在が意識にないかのようだった》

ヤングは、明治天皇は未だに外国の賓客といることが気詰まりな様子に見えたというのである。

明治天皇はグラントに感銘を受けたようで、私的で友好的な会談の場をもうけたい意向を示し、それはグラントが日光の旅から帰京後に設定された。

会談は8月10日、浜離宮で行われた。会談に陪席した日本人は三条実美と通訳の吉田清成だけだった。明治天皇は26歳、グランドは57歳。二人の会談は二時間以上もわたった。この会談でグラントは特に外債のことを警告した。

《外国からの借金ほど、国家が避けなければならないことはない。弱小国家に、しきりに金を貸したがっている国があることはご承知かと思う。そうすることで優位な立場を確保し、不当に相手を威圧しようと狙っている。彼らが金を貸す目的は、政権を掌握することにある。彼らは常に、金を貸す機会を窺っている。アジアで外国の支配ないし干渉から自由な国は、日本と清国だけである。その日本と清国が互いに戦争状態になれば、彼らの思う壺である。彼らは思い通りの条件で金を貸し、勝手放題に内政に干渉してく

るに決まっている》

明治12年、13年は西南戦争後のインフレはますます民衆の生活をおびやかし、政府財政は破産の危機にあった。紙幣1円43銭5厘が、ようやく銀貨1円と交換できるという、紙幣の信用が没落していた。財政担当の大隈重信参議は、5千万円の外債募集によって切り抜けようとし、政府内で対立が激化した。

明治天皇が閣議に臨席することが続き、閣内の議論が行き詰まったとき、最終的に天皇が裁可するしかなくなった。勿論、天皇は参議たちに意見書の提出を求める一方、元田永孚などにも相談したが、最終的に決断は天皇自らが行うことになり、結果は外債不許可を決断した。この背景にはグラントの意見が大きく影響していることは衆目の一致した見解である。

グラント将軍は8月30日、参内して天皇に別れを告げた。来日以来、各地で受けた至り作せりの歓迎に謝意を表した後、グラントは次のことを指摘した。日本には極端な金持もいなければ、極端な貧乏人もいない。これは諸国歴訪中、他国で見かけたことのない美点である。日本は肥沃な土地に恵まれ、その大半は未墾の地である。未だ採掘されない鉱山も多い。無限の種類の漁獲量と、良港にも恵まれている。何より国民は勤勉で、心中不満なく、節倹を守る風がある。日本が富強を達成するにあたり、欠けるものは何一つない、と。さらにグラントは、外国からの内政干渉にくれぐれも注意するよう釘を刺した。内政干渉を避けることで日本は内に富を蓄積することが出来、また外国に依存する必要に迫られることもない、と。グラントは、謝辞の最後を次のように締め括った。日本の完全なる独立と繁栄を望むのは自分一人ではない、アメリカ国民すべての願いである。どうか天皇と日本国民に、天のご加護がありますように、と。

明治天皇は、これに短い挨拶で応えた。ヤングによれば天皇は、はっきり快活な声で勅答(ちょくとう)を読み上げた。それは外国人と初めて会った時の、あの聞き取りにくい囁きのような声とは、まったく対照的だった。次が天皇の最後の印象を記したヤングの文章である。(『Around the World with General Grant』)

《皇帝は、いわゆる優雅な人物ではない。その物腰は不安に満ちた人物のようで、とても気楽に振舞っているとは言いがたい。人の気に入るように、ひたすら間違いを冒さないように、と願っているかのようだ。しかし最後の謁見で見た皇帝は、以前我々が見た時よりも、くつろいだ様子で、いかにも自然だった》

外債発行問題は、参議の内閣会議で真っ二つに意見が割れていた。天皇は大隈の計画に気が進まなかった。しかし、同時に征韓論当時のように内閣分裂を招くことを恐れたが、最後に天皇は外債募集案を不可とする決断を明治13年6月3日に下した。

《財政の処理が容易でないことは十分に承知しているが、今の段階で外債募集を行うことは不可である。昨年、グラント将軍は外債の利害について言を尽くした。その言葉は未だ耳に残っている。今こそ勤倹を実行に移す時である。大臣各位は朕の意を体し、勤倹を基本に据えて経済回復の道を定め、内閣諸省で熟議し、朕に報告せよ》

天皇の勅諭に反対はなかった。天皇の裁断は事実上、内閣諸省で意見対立があった際の裁定権が天皇にあることを示した形となった。これ以後、別の建議に関しても裁断が天皇に求められるようになってきた。この明治13年9月には明治天皇は28歳になられて、治世者としての意思決定をすべき立場が鮮明になった年でもあった。

『酔いの徒然』（一三四）

丸山酔宵子

『隅田川の早慶レガッタで思いだすこと』

昭和２０年。終戦８月１５日後の９月に生を受けた、将に本物の戦後生まれである。

食糧事情も儘ならぬ戦後の混乱の中で、小学校では脱脂粉乳のミルクで育ったにしては、両親のおかげであろう、子供のころから身体は丈夫であった。

給食の脱脂粉乳春の昼

酔宵子

小学生高学年では横浜市の「健康優良児」の最有力候補にもなったほどで、体力には自信を持っていた。中学からは、野球部に入り、成長期と言うこともあり、昼食の弁当は２時限か３時限にこっそり食い上げ、勿論弁当では足りず昼食時にはパン食いで補う。夕食はご飯おかわり１０膳は当たり前。中学校３年から高校１年の頃には、１年に１５ｃｍも背が伸びた。高校３年では身長１８０ｃｍ、体重７８ｋｇの偉丈夫となった。

戦後生まれとはいえ、１８０ｃｍ以上はその当時あまりお目にかからない時代で、バスに乗れば頭一つ出ているのである。

高校３年まで野球部に入っていて、体はますます頑強になって行ったのである。

ストーブの弁当食らふ３時限

酔宵子

１９６４年東京オリンピック開催年に、晴れて現役で早稲田大学に入学し、新調した学生服に角帽をかぶり、大隈講堂の入学式に臨んだのである。

クラスごとに大隈講堂前に整列し、講堂の入場順番を待っていた時、角帽にきりっと学生服を着こんだ長身屈強な学生が、つかつかと目の前に現れて、「一寸、いいですか」と肩に手をかけて、引っ張るように話しかけてきたのである。

「君はなかなか背も高く凛々しいが、我が伝統のボート部に入部しないか?」と驚愕の勧誘である。

以前から、イギリスの伝統あるオックスフォード大とケンブリッジ大のボートレースは知っていたし、早慶レガッタもテレビ中継を見ていたが、まさかそのボート部に誘われるとは、驚きで硬直してしまい、

「は、はい。・・・・あの・・・入学式が終わったら、

ご返事します」と緊張の中でやっと答えるのが精いっぱいであった。

しかし、伝統ある早稲田競艇部に、正式に誘われたことに大変感激し、心から嬉しかったことを鮮明に思い出すのである。

「・・おい丸山、ボート部に入ったら、毎日練習で、授業にも出られないんだってよ」「お前、デートも出来ないぞ・・・」

「おい、あの先輩について行って、ボート部の部室に連れ込まれたら、帰ってこれないんだってよ・・・・」などと級友たちにはさんざん脅かされたのである。

結局、姑息にも、そのボート部の先輩のところには行かず、早稲田の伝統ある運動部に入るという、折角のチャンスを逃してしまったのである。

その後の我が早稲田の学生生活は、麻雀と酒とアルバイトの明け暮れで、怠惰自堕落な惨憺たる早稲田学生生活となってしまったのであります。

アー、ズンタッタ、ズンタッタ・・・。

その伝統ある三大早慶戦（野球・ラグビー・ボート）の一つである第９２回早慶レガッタ（早慶対抗競漕大会）が、４月１６日（日）台東区隅田川で開催された。

浜町公園新大橋上流付近からゴールとなる桜橋までの３７５０メートルのコースを舞台に繰り広げられた。

半世紀以上前の大隈講堂入学式でのボート部からの誘い以来、ボート部との接点は全く無かった。しかし今年は、どういう訳か、センチメンタル・ジャーニーではないが、初めて早慶レガッタを見学しようと思い立ったのである。

当日午前中は初夏を思わせる快晴で、隅田川の川辺には外国人観光客をはじめ、散策の家族連れであふれている。ゴールのメイン会場の桜橋には、早慶のゴールに備える両校応援団が陣取って、応援合戦真っ最中である。

ポツリ，ポツリ、・・・。　急に空が暗くなり、天気予報通り雷雨予想が的中し、暫し高架下で雨宿りとなった。しかし、奇跡的にスタート直前にはすっかり天気は回復し絶好のレガッタ日和となったのである。

桜橋中央に陣取り、遥か手前の吾妻橋に目を凝らすが、陽炎でぼんやりと浮かんで、肉眼では鮮明にはとらえることができない。暫くすると吾妻橋の下に、一艘が川面に微かに見えてきたのである。

吾妻橋くぐる二艇や陽炎へる

酔宵子

残念無念！吾妻橋をくぐってきたのは慶応のボートで、早稲田は遅れること４艇身さの完敗である。

かわいいニャンコの行進だ

高橋育郎

かわいいニャンコの　行進だ
二列になって　ラッタッタ
ニャンニャンニャニャンと　百匹だ
スズメはチュンチュン　ハトぽっぽ
マーチに合わせて　踊ってる

かわいいニャンコの　行進だ
くるりとまわって　もどってくるよ

ぼくらは平和が　すきなんだ
カエルはケロケロ　ネズミはチュウチュウ
うれしい春だ　そりゃ進め

かわいいニャンコの　行進だ
きょうはどこまで　行くのかな
マーチが奏でる　明るい未来
世界平和が　ぼくらの願い
遠くで鐘が　鳴っている

絹の話（151）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

「絹の話」の今泉雅勝、長谷川千代「アトリエトレビ」の恒例企画、奄美大島泥染実習の写真です。

限りなく奄美の自然に混じりをり太古のことよ今吹く風よ

車輪梅の濃き緑のその中に幾枚赤葉その不思議

絹蛋白と車輪梅タンニンと泥田の鉄分子

奄美大島泥染紀行

「江上浩二の独り言」66

江　上　浩　二

夢のある話

日本でも月を目指す宇宙飛行士の人選の結果が話題になっている。

本当に夢のあるわくわくする話である。人生１００年と言われる現代でも、よく考えるとそうたびたびある夢のある話ではない。それも、応募された志高き人、夢をかなえようと幼き頃に心に決めた多くの中で、再チャレンジの一番高齢（といっても40半ば）の男性と20歳代の女性の２名が夢を叶えようとする一番札を抑えた。

米国が約53年もの前に月面に初めてブーツの足跡を付けたのだ。

技術をかじった事のある人間にとって50余年も前の未熟な技術で、今考えると能く月に行こうと、恐ろしい程の夢を持ったものだ。しかし誰しも数十年先の技術向上は決して否定はしないがそれがどれ程の高度化を達成出来ているのかも未知であって、数十年待って安心して夢を叶える行動を取っても意味がないのは明白で、今挑戦することに意味があるのである。

しかし、今年70歳になる自分が学生の頃、ちょうど大学院を目指して研究室に所属した時期に、日本では放射光リング（今は筑波研究学園都市に加えスプリング８という関西にある放射光リングの呼称が有名になり）が夢でその実現に向かって、装置開発グループや私のいた研究室は放射光と言ってもＸ線レベルの電磁波で、ある種の高強度のＸ線が得られたとしてどのような実験が出来るかというテーマを研究し始めていた。後年になって夢はかなえられてしまったのだが、真空の導管中を電子ビームを光の速度の近くまで加速させ、その電子ビームを磁場で少し曲げると、接線方向に放射光が発散し、それを応用しようとするものである。

大学院を卒業して、そんな放射光をも忘れて、現在のインターネットのベースとなっている光通信事業の開拓に夢中になっていた時、ある種のデータのわずかな差異に、、、それはかっこ良く言えば、品質問題、quality management, quality control of product performance specification 問題に遭遇し、その現象は６シグマ運動や高度な統計数学が関わるものであった。

こう言った「がちがち」の数学が関わるものは時代によらず必要なのだが、感覚的には昭和から平成への時代感覚で、話を戻すと公開された月を目指す宇宙飛行士の選考過程で見られた内容は平成から令和の時代に必要なグループで人が仕事を成し遂げようとする際に要求されるコミュニケーション・リーダーシップに焦点が当てられていたようだ。さらに、科学者・エンジニアのような

高度な専門職的作業は出来て当たり前、その先の火星探査への片道切符とか死に直面するような宇宙飛行士の人としての振る舞い、他人との関係性の取り方、ただリーダとして強引に他人を引っ張るだけではない姿、人物像を評価して見たいという意向が感じられた。

話を昭和から平成の時代にもどすと、私が関わった高度な統計数学が関わる光通信ネットワークの事例の話をして見たい。当時の日本と米国を結ぶような世界で一番長距離の大陸間海底光伝送では予め光が伝搬する光ファイバーのコアの部分の光屈折率を例えば９０００㎞の長さ方向に渡って調整しておかなければならないのである。それは、単に標準的な製品仕様値（平均値＋／－δ）を満足しているだけでは不十分で、９０００㎞長の経路毎に例えば始めの50㎞は１・４６５０で次の50㎞は１・４６５４というように長手方向の変動に関する値を管理制御すること、実際には光信号が伝搬する際の遅延時間を表記する光屈折率の波長分散という性能に関わる仕様のお化けみたいなものがある。

当時、米国の大手計測機器メーカーのものを使って計測するのが業界的標準になっており、私はもの作りのメーカ側の立場で製品検査を、お客様も値の張る米国製の計測器を購入し、受入検査をされていた。私が勤務していた米国メーカと顧客企業とで取り交わした仕様値を満足しており、受け入れ合格なのであるが、当時、私は技術責任者としてその膨大な品質データを検証していた。

何かがある？　という疑問であった。

光ファイバーは石英ガラスから作られているが、その屈折率は空気中と真空中とでは値が０・０３％にも満たない程度であるが、差異があるのである。起因は光の伝搬速度を真空中の値を1とすると空気中では０・０３％程度遅いことにある。僅か１０００分の０・３、ｐｐｍ表示だと３００ｐｐｍ。そうなんです、検査時の基準を真空中の値、空気中の値とするかが両者で異なっていたことに起因して、データの分布図をメーカの出荷時と顧客の受け入れ時の値とを比較すると、一つのピークを持ったガウス曲線というよりも２つのずれたピークを持つガウス曲線としてみた方がいいのではないかという私が何かがある？と言った疑問が解けたのである。

こんな僅かな事も私にとっては当時夢のような話で、本社の製造部門だけでなく、開発・品質管理や顧客技術支援部門、その他多くの人達を巻き込み、課題・対策の情報共有が出来たというあたり前と言ってしまえばそうであるが、あたり前の簡単なことが認識出来ずに、月さらに火星探査へと連なる「かぐや姫の夢」を壊したくないのです。

初狩便り（19）

花野みぷり

自走式草刈機・刈るぞー君

初狩で農業体験や農的な暮らしを楽しんでいる私たちは、「環境保全」「景観保持」を目的の一つにしている。そのためには田んぼ周辺や道路の草刈は必須なのだ。耕作放棄地の草刈りも継続的に進め、その跡地に栗や胡桃、向日葵や菜の花などの草木を植えている。刈払機という草刈機だけでなく、昨年は寄付を募って自走式草刈機（ロータリーモア）を購入した。特別の技能がなくても、女性や老人、小学生でも押すだけで草刈ができる。平らな場所はこれが威力を発揮し、「刈るぞー君」というニックネームをつけて愛用している。

油断をすると雑草は背丈ほどにも伸びる。私たちのリーダーの内山さんは三日にあげず草を刈る。私たちだけではない。2メートルを超す茅が茂る場所で作業している方に会った。「きれいになりましたね」「俺の土地ではないんだけどね、放っておいたらイノシシやキツネの住処になるからね」と。隣の田んぼのてっちゃんも線路沿いをきれいに草刈りしてくれた。そんな雑草だが、ムシトリナデシコなどのかわいい花は残してしまう。初狩の六月は、稲がそよそよと揺れ、花が咲き、ツバメが低く飛び飛び交う、やさしく素敵な季節だ。

（写真：菅野昌英・内山和夫）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2023年4月26日

風邪？　アレルギー症状？

前回　本田のひとり言　で書いた
喉の痛み　咳　熱　といった症状ですが
風邪なのか　黄沙やPM2.5や花粉なのか
確かに分かりづらいですよね
これもいつもどおり
鼻水　や　痰　などの色で判断して下さい
風邪の場合　黄色や緑色など色がついています
アレルギー症状の場合　透明の場合がほとんどです
ですので
風邪の場合は　ゆたぽん　を胸に乗せ
アレルギー症状の場合は　ゆたぽん　を腸に乗せて下さい
共通して空気の乾燥は
身体に入りやすくなり為　加湿器なども使うと予防出来ます
なので　今日は恵みの雨です
ただ予報では
午後から風が強くなり雨足が強くなりそうですので
くれぐれも気をつけて下さい
今日も笑いながら行きましょう

2023年5月1日

体力を落とさない

今日から5月が始りました
以前の　本田のひとり言　に書いたんですが
今の時期は
身体が春仕様から夏仕様に変わっている最中で
汗がかきずらく体温調節が難しいんです
ということは
熱中症になりやすいんです
とくに
昨日の様に　湿度　が高いと
やっと出せた汗も蒸発しずらく
体内に熱がこもり危険です

ですので
もちろん水分補給も大切ですが
体力や免疫力を落とさない事も大切です
3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分
とくに睡眠（23時までに就寝）
は1番大切です
特に　化学物質　が体内に多い方は
花粉　黄沙　PM2.5　ウイルス
から身体を守り　労わりましょう
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

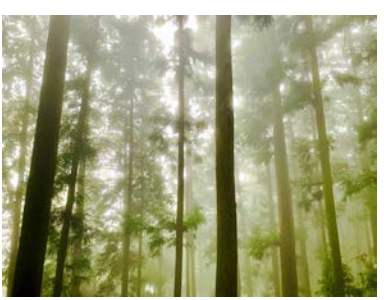
「湿気をさばく」

梅雨の季節は　湿気の季節
湿気が増えれば　気が重く
浮腫みや怠さが現れる
胃腸は飲食消化して
湿気で吸収する働きぞ
取り入れられた栄養は
湿気と共に入ってくる
湿気は　呼吸と合わされば
変化し生成　気血となれり
気血が全身　条達に
めぐれば　元気が漲ぞ

胃腸を動かす大元は
脾の臓　支配し調節す
栄養代謝は　脾によって
お肌を通して　あらわれる
元気はお肌に張りが出て
不調は太りと浮腫）みとなる

脾の臓　湿を悪むとあり
湿気が多けりゃ　弱ってく
雨・梅雨　外湿不快感
暴飲暴食　内湿停滞
湿気の過剰は　脾が弱る
脾が弱れば　栄養が
胃腸の管で　停滞し
お肌やまぶたに　浮腫みでて
手足は重く怠くなる

脾の臓　四肢を主り
手足・股関節と連動す
膝・腰　動かしゃ　活発に
座りっぱなしは　不調となれり
適度に動くが　脾を上げる



湿気の季節は脾が弱る
足腰動かしゃ　脾が動く
湿気をさばくにゃ　歩くが一番
食べたら　歩いて脾を動かすべし

「感情　陰陽」

人の感情、気を動かし
精神肉体　変動す
色んな感情　様々に
陰陽・変動　つくり出す

いきる状態　様々な
感情・起伏が　顔に出て
顔の変化は　全身の
身体の状態つくりだす
感情・表情　喜怒哀楽
健康・不調を左右する

精神イライラ怒ったり
不安や緊張　続く時
表情強張り　食いしばり
陰気は縮みて　萎縮して
身体は硬くて　ガチガチと
心のしんどさ生み出すぞ

楽しい時や嬉しい時
ほっとする時には　笑みが出て
表情ほころび　陽気が満ちて
心は　ゆったり・気を緩め
しんどい状態　開放し
気持ちも身体も楽になる

しんどさだけでは固まって
笑うだけでは緩みすぎ
身体巡りを悪くする
緊張・弛緩のくりかえし
陰陽強化の基本なり
いきるはしんどさあるけれど
最後に笑えば楽になる

あらゆる感情　あらわして
最後に笑えば　強くなる
感情変動　陰陽強化
笑顔は　心を強くする

再び糸魚川を訪ぬ　横山精真

残雪の連峰　野に春を召き
渺漫たる滄海　自ずから神を和ましむ
五年の再会　吟詠を交え
酒を傾け歓談して　世塵を忘る

再訪絲魚川
殘雪連峰野召春　渺漫滄海自和神
五年再會交吟詠　傾酒歡談忘世塵

（語釈）○吟題…令和五年四月十四日、再び糸魚川を伺った。○渺漫…海の果てしなく広いさま。○滄海…蒼い海。○神…魂。こころ。○世塵…俗世間のけがれ。

（通釈）山々は残雪を戴いているが、野にはすっかり春が訪れている。広々とした青い海は自然と眺める人の心を和ませてくれる

五年ぶりに糸魚川を訪ね、教場で吟詠指導を行った。夕方は場所を変えて懇親会だ。酒を飲み歓談し、皆さんもうち解け非日常の一日となった。

※糸魚川のホームに降り立った時、ガラス越しに雪を戴いた山々が見られ、目も心も一瞬にして洗われるようだった。駅からは歌川教場長御夫妻に一切のお世話になった。「絶句・杜甫」「俳句・夏草や」を指導。人数が少ない分、たっぷりと吟じ語った。そして懇親会は宿屋の人達の温かいおもてなしもあり、ご馳走が多くうまく、大いに呑み、且つ語った。年に似合った清談と言って良いものだった。歌川家の小綺麗な庭にはチューリップが印象に残るが、帰る二日目はご主人功一さんのご案内で観光だ。ご主人の博識と固有名詞もすらすらと淀みない解説ぶりに今回も感服するばかりだった。冬の日本海は荒れるが春になると穏やかだ。広々とした海には心が和らいでくる。だが西の断崖に「親知らず」がある。旅の母子が狭い砂場を歩いている途中、子を流されてしまった悲話が残っている。母親の悲しい気持ちが常に心を過ぎる。東の方に能生（のう）の白山神社にお詣り、ここは芭蕉が奥の細道で訪れている。「曙や 霧にうずまくかねの聲」を一吟。出会った人との一時の語らいもあった。道の駅のマリンドームにてはベニズワイガニをたらふく食べた。宿の朝食も残さず平らげた。その後の昼食も食った。並べられたお膳は豊富だが、よく食べたものだ。体重1・5キロ増し。

「はろばろと 春ならではの日本海」

「親知らず どこまで遠き春の海」

「海の幸 穴より出でて熊は食う」

編集室だより【二〇二三年四月】

今泉由利

○明治五年、創始より、百五十年にわたる「都をどり」。新生「祇園甲部歌舞練場」にて公演される「新華舞台祇園繁栄」に、お招きいただきました。

「古都京都に、繁栄を、全世界に広がりゆくよう」。京都の、おもてなし文化、花街文化を守り、継承し、花街に息づく多様な歴史、伝統、文化、日本の遺産、力を尽しておられる熱意は感動でした。

芸妓さん、舞妓さんのお點前「立礼式お茶席」での抹茶茶碗に、たっぷりの抹茶、美味しかったこと。息を合はせ、歩数を合わせ…デリケートな場を乱さないように努めることは、気持の良いことでした。

そして、「都をどり」の開演。

「新華舞台祇園繁栄」、祇園の繁栄が、世界に広がってゆくを願う、祇園甲部の芸妓さん、舞妓さんの、一糸乱れぬ舞台は「西本願寺梅花揃」…「渉成園紅葉水鏡」、親鸞聖人御誕生八五〇年、立教開宗八〇〇年をお祝いし、「八坂神社霞桜」、八坂神社の満開の桜を背景にフィナーレ。

西本願寺、東本願寺は、「親鸞 - 生涯と名宝」京都国立博物館へと続く。

浄土真宗の家、に育った私にとって、先祖、祖父母…父母…一緒にいるかの心になりつつ、親鸞聖人の残されたことごとをご一緒させていただくのでした。

○創業、宝永四年、赤福の包装紙より「旅は春赤福餅の前に立つ」虚子

隠居の祖母の部屋で、赤福を一緒したことが甦ります。遠い日が帰ってきてくれました。

○何よりも大きな、宇宙のその中に、50億年前より、時速10万キロで移動している地球に、自身が居るということに気付き、何が出来なくても、知らなくても、寿命いっぱい、自分を労ってあげなくては！そして、自分らしく消えてゆく。

○京都国際写真祭・２０２３

京都を舞台に開催されている、国際的写真展の10周年に出逢いました。

美術館だったり、町家、寺院、公共の建物であったりの会場を訪ねて歩く。

時差、文化、言語の壁を越え、さまざまな国の、さまざまな作家の、さまざまな思いの写真が揚げられていて、各々の会場へと、京都中を移動する。会場になる建物の歴史、出合える驚き、喜び、共感、懐古、学習、思想…新しい体験として、心おどりました。目的地に移動するために、町をテクテク歩く、車に乗ったり、どの会場へ行くのにも、丸くやさしい京都の山々がついてきてくださる景色、うれしさばかりでした。

京都、ありがとうございました。また京都に自身を置く日の近くありますように。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇‐〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三‐四五‐三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　〇九〇‐八四三四‐八六四六
ＴＥＬ　〇三‐六七六五‐五八三八
◇ＵＲＬ　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利